

松下幸之助記念財団 研究助成
研究報告

(MS Word データ送信)

【氏名】

花田史彦

【所属】(助成決定時)

京都大学大学院教育学研究科博士後期課程

【研究題目】

アジア認識と戦後映画評論に関する研究

【研究の目的】(400字程度)

本研究の目的は、戦後日本において映画評論家たちがいかなるアジア認識を抱いていたのかを明らかにすることである。申請者は、従来の日本映画史研究の周縁に置かれてきた映画評論家という存在を、大衆社会化・メディア社会化という近代日本の歴史的状況に向き合った知識人として定位する試みを行ってきた。

そうした研究を進めていくうちに、映画評論家にとって「アジア」という存在が、日本を相対化するうえで重要なものであったことが分かってきた。したがって、映画評論家のアジア認識を研究の俎上に載せることが必要であると考えられる。

日本映画人の戦前・戦中における中国認識については映画史の先行研究で検討されてきたが、本研究は戦後のアジア認識を扱うことによって、そうした研究史の空白を埋めることも企図している。

上記の作業をとおして、大衆社会化・メディア社会化した日本におけるアジア認識の内実と変容の一端を歴史的に明らかにする。

【研究の内容・方法】(800字程度)

本研究では、戦後の映画雑誌上の記事および映画評論家の著作を主に分析することで、彼らのアジア認識の比較検討を行なった。具体的には、下記の方法で調査を実施した。

(1) 雑誌資料および映画評論家の著作の収集・分析

『キネマ旬報』『映画評論』『映画芸術』『ソヴェト映画』『思想の科学』などの雑誌資料を中心に、映画評論家のアジア認識に関する言説を収集し、さらにその作業をとおしてピックアップした映画評論家の著作を収集・分析した。具体的には、戦前以来の中国映画通として知られた左派評論家・岩崎昶(1903-81)、「近代の超克」座談会にも出席した右派評論家・津村秀夫(1907-85)、戦後日本を代表する評論家でアジア映画の日本への紹介に尽力した佐藤忠男(1930-)の三者を対象をしばった。

(2) 映画評論家のアジア認識の内容についての分析

(1)の作業をとおして、それぞれの映画評論家がアジアに対してどのような意味を付与してきたのか、またそもそもアジアと言ったときにそれぞれの人物が何を指しているのか、ということを整理し、映画評論家にとってのアジア概念の多義的性格とその変容とを時系列に沿って整理した。

(3) 映画評論家と論壇知識人との交流についての分析

本研究では、映画評論家たちを映画界にとどまらず、より広く「論壇」において位置づけることも目指した。たとえば佐藤忠男は中国文学者・竹内実(1923-2013)と中国映画についての対談本(『中国映画が燃えている』朝日ソノラマ、1994年)を刊行している。こうした事例は、映画評論にとってアジア認識がいかなる意味をもったかということにとどまらず、より広い知識人の世界にとって映画評論家が果たした役割を考えるための素材となるはずである。

【結論・考察】（４００字程度）

まず先ほども述べたように、映画評論家の世界においてアジアというものが日本を相対化するうえで重要な位置を占めながらも、その概念は論者によって異なる多義的なものであることが明らかとなった。さらには同じ論者であっても、そのアジア認識は時期によって変化することも本研究で得られた知見である。

たとえば、日本におけるアジア映画の発掘に佐藤忠男が多大な貢献をしていたことは明白である。また佐藤のアジア認識は中国、台湾、香港、韓国といった東アジア諸国・諸地域にとどまらず、東南アジアやイスラム圏までも含んだ広範なものであった。彼は欧米諸国が文化的ヘゲモニーを担っている状況に異議申し立てをするために、アジア映画の発掘に乗り出した。ただし、佐藤がそうした意味での「アジア映画」研究に乗り出す１９７０年代後半より前には、台湾の国民政府よりも中国の北京政府と日本との関係を重視する政治的発言も見られたことも指摘しておかなくてはならない。また津村秀夫は１９５４年の東南アジア映画祭に際して、東南アジア諸国との国交の重要性を認識するとともに、台湾を「自由中国」、中国を「共産中国」と呼んだうえで、後者の参加を「容れがたい」としている。対照的に岩崎昶は戦後も中国映画人との交流を熱心に行ない、１９６０年代には中国の核武装を肯定的に捉える言説も残している。他方、台湾については最晩年の自伝において、戦前に渡航した思い出をノスタルジックに言及するにとどまっている。

こうしたアジア認識の相違は、それぞれの論者の政治的立場に由来していると考えることができる。今回は限定された個別の事例の検討にとどまったが、今後は対象の拡大やその位置づけ、あるいは映画評論の世界と「論壇」との関係などを睨みながら、より広い文脈において映画人にとってのアジア認識を考察していく必要があるだろう。